

## ～ HIV 感染症を理解するために ～

1,000 社アンケート 添付資料

昨年、はばたき福祉事業団で実施した企業 1,000 社に対するアンケートの中で、「企業における HIV 感染者の受け入れ上の問題」として、「本人の体調不良・体調悪化」を挙げている企業が 80%を超えていました。このアンケート結果から、企業が HIV 感染者を受け入れる上での最も大きな障害は、本人の体調にあると考えていることがわかりました。

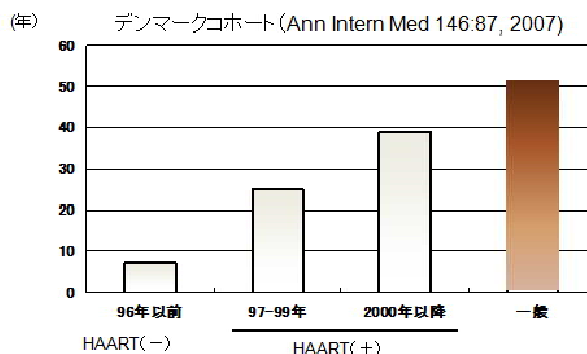
それでは、企業の方が危惧するほど、HIV 感染者の体調は本当に悪いのでしょうか？ ここで、HIV 感染者の体調は実際どうなのかを知るために、今年の「HIV 感染者就労のための協働シンポジウム」での、エイズ治療・研究開発センターの岡慎一センター長による基調講演を抜粋してまとめました。

### 25 歳の HIV 感染者の平均余命は 40 年

一般の人との差は 10 年

デンマークでの調査では、25 歳の HIV 感染者の平均余命は約 40 年、つまり平均で 65 歳まで生きられます。これは、たとえば 型糖尿病患者とほぼ同じです。一般の人が 75 歳くらいなので、約 10 歳しか違いがありません。しかも、その差は年々縮まっています。

### 25 歳 HIV 感染者の平均余命



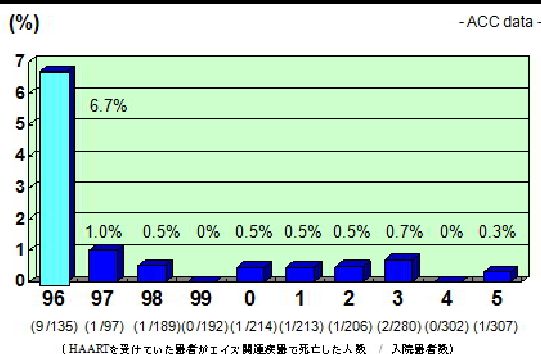
これだけ平均余命が伸びた理由は、効果の高い新しい抗 HIV 薬が続々と登場してきたからです。その結果、エイズで亡くなる方が激減しました。

### 6ヶ月以上 HAART を受けていた患者がエイズ関連疾患で死亡した

入院患者数に対する割合は、2005 年では 307 人中 1 人

1997 年からエイズ関連疾患で亡くなる人はきわめて少なくなってきました。2005 年は 307 人中 1 名でした。「HIV は慢性疾患である」と言われるようになりましたが、それはこの数字からもわかっていただけだと思います。

6ヶ月以上HAARTを受けていた患者がエイズ関連疾患で死亡した入院患者数に対する割合



新しく登場した効果の高い薬のおかげで、治療も1日1回の服薬ですむようになり、長期にわたって体調が安定している患者も増えてきました。また90日処方の良いため、通院回数も年4回でOKという人もいます。

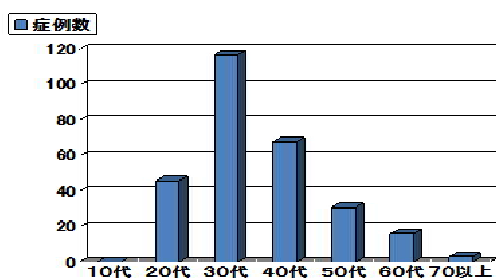
このように体調が安定してくると、自分自身の将来を考えた生活設計が必要になってきます。

### 患者は30代の働き盛りが最も多い

#### 安定期にある患者は社会復帰を促すことが必要

外来患者は30代が最も多く、20～40代で全体の80%を占めています。最近では、夜間や土日に診療を行う病院も少しずつ増えてきており、働きながら治療が可能な医療体制もできつつあります。こうした働き盛りの年代は、十分就労に耐えうるため、患者の社会復帰を促すことが重要になってきました。

### 外来患者の年齢分布



安定期の患者は社会復帰を促すことが重要

以上のように、HIV 感染による体調不良、体調悪化は受け入れ上の障害となるとは言えません。HIV 感染者は病気を理由に仕事を辞める必要はありませんし、また就労しながらでも受診は可能な時代になっています。